

刊行にあたり

日本経営学会は1926年に創立され、2016年をもって90周年を迎えることになった。これを記念して、「日本経営学会賞（著書・論文）」受賞作品の英文翻訳による対外発信、50周年記念講演以降の周年記念講演の書籍（電子データ形式）への集成、そしてこの『日本経営学会史 創設51周年から90周年まで』の出版が企画された。本書がこれまでの40年間を対象にしたのは、創立大会から第50回大会までの歴史についてはすでに山本安次郎著『日本経営学五十年』（東洋経済新報社、1977年発行）にまとめられているためである。日本経営学会の創立からの90年間の歴史については、これらの両書を通じて振り返っていただくことになる。

本書では、『経営学論集』に掲載されている統一論題を対象にして、それらの趣旨と論点について分析し、今日的な視点で評価することで、日本経営学会が何を課題にしてどのような分析と議論をしてきたかを歴史的に跡付けることを目的とした。各大会における統一論題にはその時代における重要な課題が選定され、その課題に対して報告者による渾身の分析が加えられ、質疑応答の成果が『経営学論集』に「論文」として掲載されている。それゆえ、各大会の統一論題が時代の経過の中で相互にどのような関連をもっていたのか、日本経営学会がこの40年間にわたって追い求めてきた経営課題の意義と社会的な貢献がどのようなものであったのか、を改めて問うのが本書の課題である。それは、日本経営学会が歩んできた40年間の学問的格闘の歴史を跡付けることにもなり、また100周年に向けた発展への礎になりうるものでもある。

この40年間の統一論題を振り返って概観してみると、日本経営学会は新しい経営現象と常に格闘してきたことがわかる。それは、企業に対して外部から加えられる大きな経済的・社会的・自然的な変化への対応と市場競争の

中で競争優位に立つための自己革新をすることから生じる課題である。つまり企業には、外から迫られる課題と内なる革新として自ら変化していかざるを得ない課題がある。

さらに、市場のグローバル化、情報技術の急速な進歩、企業と社会との関係などが、経営学に狭い企業概念を超える新しい課題を投げかけ、それらの分析と検討を迫っている。非営利組織の経営、ソーシャルビジネス、異文化経営、企業倫理、そして企業統治など、経営学の研究対象は拡がりと深さを増してきている。

このような状況におかれている企業は多様な経営現象を引き起こしてきた。経営学はそれらの経営現象に分け入って分析し検討することで、そこから一定の法則を見出し、それらの法則を体系化して理論としてのレベルにまで引き上げる試みを絶えず繰り返してきた。そして、その理論（概念）を現実の企業経営に適用することで、経営実践のレベルを引き上げて経営活動の効率化を促進し、市場で競争優位に立とうとしてきた。その意味で、経営学は実践の科学であり、研究対象である企業の経営実践は経営学の理論を適用されることで同じところに留まることを自ら否定し、新しい状況の中に入っていくことで、そしてときに新しい状況を創り出すことで競争優位に立とうとしてきた。企業の経営実践とそれを研究対象とする経営学とは、このような相互促進的な関係をいわば宿命的に担ってきた。

しかしながら、歴史は直線的に進行してきたわけではない。この間の競争中心の社会においても、社会的格差が大きくなり、非正規雇用を増大させ、あるべきディーセント・ワークがないがしろにされ、またコミュニティが衰退されるように逆機能し、これまでの社会の持つサステナビリティと相容れない形で企業と経済の発展が促されてきた側面もある。そして今、企業の経営実践はグローバル化と情報化のまったく次元の異なる段階に入ってきており、その変化の大きさとスピードは企業の中の人間と企業を取り巻く社会を大きく変えていく可能性がある。今後どのような方向に向かって進んでいくのか、いかなる取り組みが望ましいのか、日本経営学会 100 周年に向けての課題設定、あるいは 100 周年の先の経営学の課題設定が問われている。これらの課題への示唆については、まさに本書を繙いていただき読み

取っていただくことである。

本書は、日本経営学会のこれまでの40年の歴史を問うとともに、その伝統を次の世代に引き継ぐという趣旨から、これまで学会の様々な役職を担うことで活性化に貢献され、いまなお学会活動に積極的に参加されている方々にご執筆をお願いし、お力添えをいただくことで出版にこぎつけることができた。執筆順にお名前を記せば以下のとおりである。片岡信之、田中照純、坂下昭宣、河野昭三、奥林康司、仲田正機、宗像正幸、小松章、森本三男、植竹晃久、林正樹、齊藤毅憲、貫隆夫、村田和彦、高橋俊夫（以上15名、敬称略）である。そして、元理事長の片岡先生には編集長をお引き受けいただき、本書全体についての構成や資料の整理をすべてお引き受けいただいた。90周年記念事業実行委員会として、執筆者各位に深甚の謝意を表したい。90周年記念事業実行委員会は、海道ノブチカ、高橋正泰、上林憲雄、佐久間信夫、小阪隆秀から構成されたが、当時の海道理事長のもとでのすべての理事・幹事のご協力をいただくことで可能となった。本書の出版をもって、この90周年記念事業が完了することになる。関係者各位に深く感謝申し上げたい。

90周年記念事業実行委員会委員長 小阪隆秀